破壊神マーヤの一日
筆者 カムケン
イラスト Shin

破壊神マーヤの一日

カムケン

しっぽ漬

目次

プロローグ　世界は萌えているか？　５
１章　ファーストコンタクト～未知との遭遇　３９
２章　迷い竜オーバーラン！　８７
３章　スクールデイズフルパニック　１６９
４章　天元突破！　紅蓮と空の境界　２０７
５章　創世記エヴァとマーヤとランデブー　３０３
エピローグ　破壊神マーヤの一日　３５０
あとがき　３５６

プロローグ　世界は萌えているか？

――人間は神と魔神に逆らえぬ家畜となるであろう（Búfé og menn yrðu að fara gegn Guði og Satan）

これは人間保護機関ノルンが提出したレポートの一つなのだ。

神は人間にとって良い者なのか私は疑問に思うのだ。神は人間の願いを叶える者であり、絶対の存在であり、支配者。

さて、お前達は神の為なら何をするのだろうか？　願いを叶えてくれるのならば、自分の身が滅びたとしても、大切なモノを差し出すのであろう？

人間を殺してでも……生贄と称して人間の命を供物として捧げ、爆弾を抱えて多くの命を奪おうとするのだろう？

私は無神論者だ。絶対にそうしないだと？　確かに神を信じない者は多くいるのだろうな。だが、極限の状態に追い詰められた時、お前達は何に願う？　神か悪魔か？　人それぞれなのだろう？

神や魔神にはそういった極限状態の者を狙う者が多い。神と魔神は人間からは感謝の念、喜び、嫉妬、妬み、恐怖、快感といった精神エネルギー（マテリアル）を得て成り立つ存在なのだ。
神であろうが魔神であろうが人間を虫ケラのようにしか思わない輩は少なからずいるのだ。そんな神々や魔神共に支配される世界を想像した事があるだろうか？
人間は精神エネルギー（マテリアル）を吸収する為の只の使い捨ての電池に成り下がる。そんな未来……
かつては私も人間を虫ケラのように思っていたのだが、それはまた別の話にしよう。
この情報媒体（メモリーディスク）はどういった形で出回っているのだろうか？　映像なのか、それとも音声？　文字なのだろうか？　私はこの情報媒体（メモリーディスク）を多くの人間達が目にする事を願って作成したものなのだ。言うならば、私の１日１日を記憶したメモリだ。そう……これはお前達にとって明日の出来事なのかもしれぬな。

２０１４年４月２６日、１６時４６分　日本、浦賀水道上空。
そこには鯨を流線型にしたような船が不釣合いにも空に漂っていた。
それが一瞬にして色を失い、透き通るような透明となる。
グリフォン級　軽準洋用戦艦トロイホース。全長１５０．０メートル、全幅１８．０メートルの機体。ステルス機能も備わり、只の偵察ならば問題は無い。
だが、相手がノルンで、あの破壊神マーヤならばこの小さな戦艦では小石程度の武装でしかない。
「かつてサタンと呼ばれた時代が懐かしいな。今じゃ上も下もあったものじゃない。こんな小さな戦艦１隻を借りるのが精一杯とはな」

ブリッジで、溜息をつくルシファー。その１２枚のコウモリのような翼がうつむくと、萎れて見える。
「ノルンはそれほどの脅威なのですか？　性能的にはユグドラシルは厄介ですが、この戦艦たった一隻で、４００名ほどの乗員もいないという話ではないですか？」
隣の席のオペレーター、赤い髪の妖魔イブが首と一緒にコウモリの翼を傾げる。
彼女は年齢と経験はあるが、ルシファーの隊に配属されるのは初めてだ。
「イブ。お前はノルンのマーヤについて何を聞いている」
「破壊神マーヤ……その名を口にするな素性を調べるなと……私には都市伝説のような存在です」
「ハハハハッ！？　都市伝説か！　良いな。その都市伝説の破壊神マーヤはこの戦艦の乗員はおろかこのルシファーさえ倒す存在だ」
その言葉に青ざめた表情で凍りつくイブ。
「そんな馬鹿な……ルシファー様を超える存在がいるなんて！？」
「良い恐怖だ！　俺に飯でも奢ってくれるのか？　そんなヒマがあったら仕事に戻れ！」
イブの背中を叩き、作業に戻らせる。
「は、はい！？」
「ユ、ユグドラシル！？　確認しました！？　南東の方角、１９４６、３６！　視認できます」
「なんだと！？　モニターに写せ！」
立体モニターに映し出されたのは機影、龍を流線型したような巨大なフォルム。これこそがアトラース級強襲用戦艦空母　ユグドラシルだ。１００万人以上収容可能なのに対して３００名ほどの乗員しか

いないのだから驚きだ。
こちらに気づいていないのか、砲身も向く事も動く気配すらない。
いや、有り得ない。ステルスモードを使用せずにこの場に留まるなど……
「ステルスモード無しで一体何を！？　これでは国神域外条約違反です！　直ちにエデン総連合および天魔総合連盟に伝達します！」
通信を開始するオペレーター。これで終わるならノルンなど容易いものだ。世界の神々を敵に回して何がしたいのか？
「このユグドラシルのスペックは……波動〇やメガ粒子〇、対艦ミサイル付属、ロボにまで変身でき、ピン〇イントバリア内臓。全長約７，７７７メートル、質量７，７７７７７７７７７ｔである……何ですかこれ？　私的には１７へぇ～ですね」
イブから機密書類を取り上げる。
「読むな！　それはノルンのかく乱作戦だ。情報を改竄しているのだ」
今回の新人は余計な事にツッコミを入れる者らしい。
「これって、まるで人間の架空の創作物から得ている物のような……そんな感じがしませんか？」
「良いから仕事に戻れ！」
「はい！？」
世界の神を敵に回してもしたい事……まさか！？
「オペレーター各位！　世界の上空を探れ！」

「しかし……ノルンが接触しようとしているのは日本の人間なのでは？」
ルシファーの指示に動揺するオペレーター。
「俺の読みが正しければ……世界で奴が動くはずだ」
タッチパネルを操作するイブの顔が凍りつく。
「世界各地に高精神エネルギー（マテリアル）反応有り！　ＢＯＴマーヤ多数確認！」
ＢＯＴは自分の分身で、監視役として本来は使うものである。戦闘能力は皆無のはずなのだが、ここでＢＯＴを放つ意図が分からない。
「なに！？　数は？」
「数、およそ１０００体！？　降下を始めています。降下順にベルギー、オランダ、フランス、イギリス、デンマーク、フインランド、スウェーデン、ギリシャ、スイス、スペイン、ドイツ、アイスランド、ノルウェー、ロシア、イタリア、インド、中国、韓国、モンゴル、タイ、カンボジア、アメリカ、カナダ、メキシコ、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニア、マダカスカル、エジプト、ガーナ、イスラエル、ペルシャ……まさか！？　全世界に降下確認！？」
「馬鹿な！？　ノルンは世界征服でも始める気か！？　何を考えている！」
いや、読みが当たったとも言えるが、世界各国に送るとは大胆すぎる。まさかマーヤはあのプランに気づいているのか？
「いかがいたしますか？」
「各国の連合、連盟に通達し、ＢＯＴの迎撃に向かわせろ！」

ユグドラシル内部、カタパルト。
それは一つつの巨大な甲冑だった。美術品を思わせるような光沢を放つ白色、身体の隅々は様々な機械と武器で覆われ、背中には六枚の羽と戦闘機のようなジェットエンジンを思わせる排気口が備わっている。
そしてその美術品に埋め込まれているように存在する銀髪をなびかせる少女が一人。
近づく者に反応してか、その少女の頭の上に存在する狼の耳がピクンと跳ね、甲冑の下から出る九尾の銀色尻尾が荒々しく揺れる。
「マーヤ……そんな装備で大丈夫ですか？」
マーヤは少女の声に振り向き、こう答えた。
「大丈夫だ問題ない！」
美人だと思われた少女が、どや顔で一瞬にして台無しになる。
そこには栗色のポニーテールに西洋の神官服を思わせる白いドレスに身を包む少女が立っていた。顔馴染みの上司、ベルダンディ（笑）がこめかみにサブイボを浮かべて睨むよう見つめてくる。
「何ですかこの大量殺戮兵器は？　まるで貴方に見せて貰ったガ〇ダムのデンドロ〇ウムやＩＳのようですね？」

「アレンジと言って欲しいのだが、どちらかというと、アーマー〇コアのホワイ〇グリンドとミーテ〇アにストライクフ〇ーダムをくっ付けたアレンジの方が強いのだがな」
「という事で私は行くのでな。バックアップは任させたのだベルダンディ」
ブースターパックに九尾の銀色尻尾を収納し、発進準備に入る。
「待ちなさいマーヤ！　また可笑しな物を造って！」
歩行しようとすると、少女の片腕によって４．２メートルの７．５ｔの通称ＯＳと呼ばれるオートストライカー、スレイプニルの巨体が一瞬にして引き戻される。
「何て馬鹿力なのだ……戦闘は不得意だと聞いていたのだがな」
少女の方に向くマーヤ。
「で、それで何をしようと？」
冷たい視線が向けられ、マーヤさんはすぐに行動をしなければいけないような気がした。
「……神（マーヤ）は言っている全てを救えと！」
「待ちなさいと言っているのです！　何ですかその装備は！　日本はおろか、世界を火の海に変えるつもりですか！？」
進もうとすると、ベルの怪力によって再び、引き戻される。
「何なのだ？　ベル……ダンディ（笑）」
笑みを浮かべて言うと、ベルのサブイボがさらに追加される。
「ダンディではありません！　ベルです！」

「ふむ、ダンディ坂野。これを大量殺戮兵器と呼ぶが、スレイプニルは私にとって拘束具にすぎぬのだ。恐らくは生身の私の方が速い。言うならばスレイプニルはマーヤさんの力を制御し、マテリアルを多量に生み出し、楽に星滅魔刃波（ラグナロク）を連発させるマッサージチェアのような物なのだ」
「……」
沈黙するベル。
「という訳で私は行くのでな」
踵を返すマーヤにベルの殺意のご馳走が向けられる。
「待・ち・な・さ・い！」
「何なのだ？」
「この戦いに星滅魔刃波（ラグナロク）を連発する意図がどこにあるのですか？」
「よく言うではないか？　獅子は兎一匹を狩るにも全力を尽くすらしいぞ」
「貴方はネズミ一匹を退治するのに核兵器を使うのですか？」
「青いタヌキ型ロボットならそうするのではないか？　魔神どもが私のおぞましい狼の耳も齧ってくれるのではないかと期待してるのだが、そういう事も起きぬが、全力で行くのでな」
「ぬるぽ！」
ベルの小さな身体にガシッ！？　とスレイプニルが掴まれる。
「ガッ！？　思わず答えてしまったのだが、何なのだ？」
スレイプニルがギギッと音を立てる。竜の皮膚よりも頑丈なはずのオリハルコン合金が軋むような音

が聞こえるのは気のせいと思いたいものなのだが、実は現在の女神は戦闘に向いているのではないのか？
「１９９９年８月１１日や２０１１年、５月２１日に貴方はラグナロクで二回ほど世界を滅ぼしました！　私がどれだけの苦労をしたと思ってるのですか！？」
ベルの顔を見ると、涙目になる。
「いや、あれはな……人命や動物、草木一本すら被害は出ておらぬではないか、どれも人間の記憶に都市伝説として刻まれたのみなのだ」
「地球にわずかに影響しました。始末書の山では済まないのですよ！　エデン総連合や魔神のヘルの過激派や天魔総合連盟にマーヤの引渡し要請や高額なマテリアルを要求されています！」
「それも私が何度も話し合いをして解決したではないか……」
「神々や魔神が一組織の神、一人についての話し合いなど異例の事態だったのですよ！」
「ふむ……私はあの会議で、友達がたくさん出来て万々歳だったのだがな」
「貴方という神は！」
ベルが声を張り上げた刹那、ビーッ！というブザー音が鳴る。
『漫才はそこまでにして、そろそろ未来が変わる時刻です。この機を逃したら世界終末より酷い事態が起きます』
天井のスピーカーから未来の女神、スクルドの幼い声が聞こえた。
「邪魔が無ければすぐに出れたのだがな」

「……マーヤ」
『姉さん、未来線をＫルートからＶルートに変更にします。よろしいですね？』
「許可します」
『ハッチ解放、発進スタンバイ』
スクルドの声と共にライトが点灯し、ハッチが解放されていく。
「いつの間にこんな物が造られていたのですか！？　スクルド！？」
急ごしらえで造ったにしてはよく出来ている。
『全システムオンライン。発進シークエンスを開始します』
進路の床に緑光のラインが照らされていく。
「マーヤ、スレイプニル行くのだ！」
電子掲示板にＣＬＥＡＲの三つの文字が白く点灯し、赤色のＡＢＯＲＴがＬＡＵＮＣＨの青色へと一瞬にして変わる。
大型ブースターが光線を放射して一気に音速まで加速する。
「マーヤあああっ！」
ベルの悲鳴のような叫び声が聞こえる。
バックモニターで確認すると、黒焦げになったベルが鬼のような形相をしていた。
帰ったら確実に絞られるなと思いつつ、マーヤさんは降下を開始する。

無数のの経文と共に大空を黄色の光の膜が覆っていく。天照のマテリアルを感じる事からマーヤさんの頼みを了解したらしい。
（天照様から入電がありました。結界を張ったとの事で、地上側の人間からは見えないので存分に戦ってくださいとの事です。被害もできる限り最小限に抑えてくれるそうです。私達、ノルンもできる限りは地上の被害を抑えますが……こちらとしても限界があるのでよろしくお願いしますねマーヤさん）
スクルドの思念通信（テレパス）が入る。
（被害を受けるのが前提なのだな。私はそんなに信用が無いのか？）
ユグドラシルから緑色の粒子が放出される。
（あれだけの事をすれば当たり前だ。マーヤ、お前に封印処置の制限を設ける）
過去の女神、ウルドの思念通信（テレパス）をキャッチする。
「縛りプレイというのはマーヤさん的には萌えないのだがな」
（そう言うな。世界を破壊する度に過去を修正するこっちの身になってみろ。とりあえずは５秒ごとにＯＳとＰＣをシャットダウンする。切り替えはそちらに任せる。時間を止めても５秒ごとに封印するのでよろしくな。なお、お前の行動は全て条約違反に該当する為に一切に兵や援護攻撃は行えない）
通称ＰＣ、マーヤさんのパーソナルコンピューターはいわゆる身体なのだ。そんな物を抑えられたらそこに存在できなくなる。何台もＰＣを持ってるマーヤさんでも、時間ごとに一台、一台をシャットダ

ウンにされたらたまらない。
かと言えば、マーヤさんが無理に起動しようとすればマーヤさんのＰＣを封印しているユグドラシルは負荷に耐えられずに落ちるのであろうな。
「了解するしかないのだろうな」
天魔総合連盟のトロイホースから無数の魔神達が現れる。およそ４００体、監視の船としては少し規模が大きいのだが、プランの阻止をそれなりに警戒していたのだろうな。
スクルドの未来予知では天魔総合連盟がカオスプランを使うという話なのだ。
「さて、この封印縛りプレイで、マーヤさんのＢＯＴの援護は何処までできるのか？」
不安を感じた刹那。
（各国にマテリアル反応多数だと！？　およそ１００００！？　動きが速い！？　ＢＯＴの迎撃に向かわれている。このままだとヤバイな！？）
ウルドの不安の思念通信（テレパス）が送られる。
あらかじめ予期していたかのような対応の速さだ。戦闘に不向きなＢＯＴでは魔神一体を倒せる程度の性能なのだ。
（新たに各国にマテリアル反応確認……所属不明！？　ＵＮＫＮＯＷＮ……数はおよそ１００００！？これはまさか！？）
スクルドの声が凍りつくような思念が感じられた。
「やはり来たのだな」

スレイプニルのバイザーモニターから映し出される魔神の敵マテリアルを全て自動ロックした事を目で追い、確認する。
背中に格納されたキャノンが両肩と両腰、両腕の大型砲身が魔神に向けられる。思念通信（テレパス）の命令によって全ての砲身から虹色の光線と背中から無数のミサイルとフ〇ンネルもどきが発射される。
全属性に対応する光線、ファンネルもどきと無数のミサイルが魔神に当たり虹色の爆発を伴う。
（お前達……来てくれた事に感謝する。だが、今回は世界崩壊の危機がとあるといえ、私情の方が大きい。無駄に命を落とす事はないのだ。前回の大戦では数人が捕まり、命を落とした者もいると聞くのだ。命が惜しければ退散するのだ）
スレイプニルの肩のコンテナから二発の四角状の物体が射出される。その物体からは無数のミサイルが発射し、魔神に向かって行く。
ミサイルが光、闇、炎、氷、水、雷を伴い、爆発する。
（聞いたか？）
（俺のログには何も残ってないな）
（ヒャッハー！　マーヤとランデブーだ！）
（エデンから来ました！）
（この戦いが終わったらマーヤと結婚するんだ……）
（マーヤ俺だ！　結婚してくれ！）
（ウホッ！　いい男！）

（アメリカなう！）
（戦いのケツドラムが聞こえる）
（マーヤは俺の嫁！）
（マーヤ厨死ね！　マーヤが嫁とか誰得だよＷＷＷ）
（ジャミングなら任せろ！）
マーヤさんは苦笑いしつつ、スレイプニルのバイザーモニターから世界各国の映像に切り替える。
向かっている国の民族衣装を着ているＢＯＴマーヤの前衛にはそれぞれに影のシルエットが映し出される。天使や悪魔、魔女、エルフ、獣人、妖精、人形、鎧騎士、獣、龍、ゴーレム、アメーバ、昆虫、爬虫類、両生類、鳥類、魚類、植物、ロボット、刃物、衣類、寿司、車、アルファベット、球体、影の形は様々で何処から来たのか身元が分からない名無しの者達。かつては敵だった者らしい輩が思念通信（テレパス）を通じて仲良くなった。
（私の作戦は全て私情だと言ったらどうするのだ？）
名無しの者達に試すようなマーヤさんの言葉にしばらく沈黙したかと思えば……
（初恋のお手伝いさせてください）
（リア充爆発しろ！　末永く爆発しろよなｗｗｗ）
（知らぬぞ……勝手にするのだ）
（マーヤさん、来ます！）
スクルドの思念通信（テレパス）が割り込んでくる。

魔神どもが一斉にデバイスでマジックスペルカードを発動させ、ビックバーンを起動する。
無数の爆発と共にマグマを撒き散らし、空一面が一瞬にして真紅へと塗り替えられる。
爆発を続ける無数の人工太陽の中から現れたのは錐揉みしながら加速する無傷のスレイプニルの姿だった。
スレイプニルの無数のバリアを折り重ねた、ＡＩフィールド（ＡＩフィールドとも、マーヤさんが誰かを守りたいという愛の力の障壁）が機体を無事にしていたのと、わずかな隙間を通り、直撃を免れていたのもある。
いくら完璧なマーヤさんでも直撃を受ければＰＣはオーバーヒートする。
ルシファーにアドバイスしたマーヤさんが開発した詠唱時間０で魔法が使えるマジックスペルカードを導入させたせいかもしれいのだが……やはり隙が無い。
「これで私も本気で行けるのだ！　星滅魔刃波（ラグナロク）！」
四次元裏ポケットから出たキューブ状のデバイス、パンドラにマジックスペルカードを読み取らせる。
【ＲＡＧＮＡＲＯＫ】
パンドラが幼女ボイスの英語発音で名前を復唱するとスレイプニルの両腕の巨大砲身から虹色の光の刃が伸び、魔神の一部隊とトロイホースと遥か彼方の月を掠めていくのがバイザーモニターのサーチアイで確認できた。
トロイホースはわずかな砲身をもいだにすぎず、月もわずかに切れ目が入ったのみのようだった。
（マーヤさんやりすぎです！？　未来線が変わりました！？）

トロイホースから蛇のようにうねる黒い砂嵐のような無数の光線がマーヤに向かう。
マーヤが避けようとすると、時間経過の為かスレイプニルが解体された。黒い砂嵐のような光線は解体されたスレイプニルに当たり、黒いドロドロの液体となり、無数のコウモリへと変化する。
トロイホースは攻撃した相手を追尾するウイルス線を放つ厄介な戦艦なのだ。
「今のでか！？　月の形を少し変えたぐらいで！？」
向かって来るコウモリはウイルスを持つ厄介な相手だ。
「目からビーム！」
マーヤさんの目から光線が発射され、無数のコウモリ当たって爆発する。
（マーヤさん。後ろです！）
「分かっておる」
ウイルス線の刃を放つ魔神の刃を十二枚の羽を開き、自分を包んで防ぐと、オレンジ色の蜘蛛の巣状の障壁が包む。さらにそれを覆うように逆三角系のフィールドが展開し、青白い光が同時に包む。
「馬鹿な！？　ウイルスが効かない！？」
戸惑う魔神兵達にマーヤは微笑する。
通常仕様の戦闘障壁である結界障壁（ファイアーウォール）ならウイルスを貫通してしまうだろうがマーヤさん特性のＡＩフイールドは三重構造のマーヤの領域には適うまいて。
「ルシファーの兵らは皆が同じようなデザインのイマイチＰＣを使っておるのか？」
対峙する魔神は典型的な羊のような角とコウモリのような翼が二枚、筋肉質の身体は黒い。

「ふざけるな！」
再び斬りかかる雑魚ＰＣに羽をデコピンの形にし、弾き飛ばすと、空の彼方へと飛んでいく。
「うわあああっ！？」
「そこはバイバイキン！　と言っていただかないとだな……ふむ、少し飛ばしすぎたか？」
月まで飛んでいなければ良いのだがな。
「マーヤ、よくも！　同胞の敵！」
遠距離戦では勝てないと見たのか、ウイルスソードで斬りかかろうと魔神数体にマーヤさんは十二枚の翼を伸ばす。
「ここは破滅炎光線（レーヴァテイン）Ⅱといくか」
【ＬＡＥＶＡＴＥＩＮＮⅡ】
下空に配置していたパンドラが故意に落としたマジックスペルカードを読み取る。
「なっ！？」
十二枚のうち、二つの翼の先端部分が砲身へと変わる。
「一応は言っておくのだが、ＰＣが壊れぬ程度には手加減しておるのでな」
砲身から赤黒い光線、破滅炎光線（レーヴァテイン）Ⅱが発射される。
「ば、馬鹿めどこを狙って……」
破滅炎光線（レーヴァテイン）はマーヤさんが考えたオリジナル魔法である。赤（炎）、黒（闇）、白（光）雷の合成魔法であり、距離は３７．８キロメートル、物質に当たれば核爆弾のように大爆発を起こす。

と、言ってるそばから先ほどに避けた輩の後ろにいた魔神兵に当たったのか、赤黒い爆発に巻き込まれて吹き飛んでいく。
「ぎゃあああっ！？」
さらに破滅炎光線（レーヴァティン）Ⅱを発射しながらマーヤさんは回りながら魔神どもをなぎ払う。
「あああああっ！？」
魔神の悲鳴が木霊しているように思えるが、本当に手加減しているのだ。
次々と魔神兵が大爆発を起こして空が火の海と化していく。
（お前それで本当に手加減してるのか？　って、ぐらいに見えてこれで本当に敵のＰＣがクラッシュしてないのですから不思議なくらいですね）
「手加減しておるぞ……瀕死かもしれぬが」
（半殺しって奴ですね素晴らしい心遣いですね）
パチパチと拍手喝采の思念通信（テレパス）が聞こえてきそうな感じだが、何か毒を含んでいるような気がしてならない。この魔法は嘘はつけないはずなのだが。
（スクルド……皮肉なのか分からぬが？）
（ルシファーさんに対する心遣いなのですよね？　それでお仲間さんを半殺しにして……）
（もう良いのだ）
スクルドの毒を含む言葉を気にせずにさらに千葉県に向かって加速した。

「マーヤを追え！」
ブリッジのルシファーが各オペレーターに命令する。
トロイホースで十二枚の翼を持つマーヤを追うと、その姿が銀色の光を帯びて狼の姿へと変わるのを拡大モニターで確認する。
「破壊神マーヤ！　メインサーバー切り替わります！　これはメインフレーム、賢狼神マーヤ！？」
マーヤが翼を持つ巨大な狼へと変わり、遠吠えをした刹那。
強烈な振動が周囲に走り、全てを吹き飛ばしていく。
その音波衝撃に耐えられずにトロイホースが傾き、金属片の一部が舞い上がっていく。
「イブ！　被害状況を確認しろ！」
トロイホース内部では緊急アラームが鳴り響き、艦内が非常灯へと変わる。
「外部損傷率４０％、内部損傷率１０％、システム正常」
「残った魔神兵を援護に向かわせろ」
「駄目です！？　先ほどの音波衝撃を加えて魔神兵３５０名ロストしています！？　魔神兵数残り５０名も通信トラブルで繋がりません！？」
「３００以上もの兵が一瞬にしてやられるとはな」
１２枚の翼を広げて空を駆ける狼、損傷した戦艦では追いつくのがやっとだ。

「このままでは……」
「マーヤを追え！」
「しかし……」
「良いから追うんだ！」
「は、はい！」
ルシファーの命令でオペレーター達が慌てて操作を始める。艦はコンピューター制御で簡単なボタン操作で最低一人いれば良いのだ。慌てる状況じゃない。
「これは！？」
アラーム音と共に警告表示がモニターに映し出される。
「どうした？」
全ての照明が消え、艦が傾き始める。
「外部からウイルスが進入しました！？　システム再起動！？　アクセラレータ起動します！　ウイルス検知しました！　４０、６０、９０、１８０！？　駄目です！　ウイルス抑えられません！？　なおもウイルス進行中！？」
再び、非常灯が点灯するが、警告表示とアラーム音が鳴り響く。
「ネットワークの回線を切れ！」
「……ネットワークシステム拒絶できません！　ならびにセーフモード切替不能！？」
オペレータ達のタッチパネル操作が徐々に素早い動きになっていく。

「馬鹿な！　マーヤ以外に誰が！？　機関室に連絡を取れ！」
「……機関室内部に謎の高熱反応確認……機関員ＰＣ消滅！？　マテリアル反応確認できません！？」
懐から携帯無線機を取り出し、電話するルシファー。
「天魔総合連盟のルシファーだ。天照（アマテラス）、マーヤが日本へ向かっているぞ」
白い狼の耳を持つ髪の長い女性が携帯液晶画面から浮き出るように映し出される。
「分かっています。日本の神々はマーヤを受け入れます」
「馬鹿な！？　条約違反者を国へ入れるつもりか！？　ノルンに日本を支配させる気か！？」
「マーヤさんはノルンとしてではなく、難民神として受け入れる予定です」
「マーヤは破壊神だぞ……保護されるような玉か？　日本を支配されるのがオチだぞ」
「彼女はそんなことはしません……なぜなら私と同じ犬耳連合の同士だからです！」
手を犬のようにし、ポーズをとって見せる天照にルシファーは無言で電話を切る。
駄目だこいつ早くなんとかしないと……どいつこいつもバグっている。
「天魔総合連盟のルシファーだ。キリスト！　世界のマーヤのＢＯＴを阻止しろ！」
インプットした番号を押すと、携帯液晶画面から人が良さそうな金髪の青年の映像が浮き出る。
「ルシファーか……ボクが許可したんだよ。僕の影響が無い国でも他の神はマーヤを難民神として受け入れているんじゃないかな？　そもそもエデンが天魔の指示に従う義理は無いんだよ。それに条約違反しているのは天魔の方だよ。国神域外違法で君たちの方が危ういと思うけどね。早く日本に出る事だね」
プツリと通話が切れる。

あの二人は完全にマーヤの味方らしい。
ヘルの過激派の一人、セックに連絡をとる。自分の軍に頼れない今、唯一の頼みの綱だ。
「セック、俺だ。ルシファーだ」
液晶の３Ｄ映像は長い癖毛の女性を映し出す。
「お前、マーヤに手を出したろ？　お前死ぬしかないよ」
セックの声と共に二人のケラケラと笑う声が聞こえる。
「どういう事だ？」
答える間もなく、通話と映像が切れる。
「……そんな！？」
椅子から立ち上がるイブ。
モニターが警告表示の赤文字で埋まっていく。
「ウイルスの出所は？」
「分かりません……ただ、この手口はノルンやエデンの者とは思えません」
「なるほどな」
だいたいの想像はつく……自分をよく思わない者、それは……
「新たなウイルスが検出されました！？　モニターにマーヤの姿が映し出されています！？」
「見るな！？　そいつは視覚性ウイルスだ！」
ピアノの伴奏と共に巨大な狼のマーヤの顔が接近する。うるんだ瞳で何かを訴えるように……まるで

幼気なチワワのように……
ルシファーの忠告もむなしくオペレーター全員がモニターに注目してしまっていた。
『くぅーん』
マーヤの子犬のような鳴き声を上げた刹那、オペレーター達が鼻と口から血のような液体を出して倒れる。
『どうする～♪ルシファーさん？』
音楽に合わせて歌うマーヤの台詞がモニターに流れた。
『マーヤさん可愛いお！？』
ウイルスのせいか妙な言葉を口走り、オペレーター達は気絶した。
視覚と聴覚に作用するウイルスらしい。だが、なぜ血が流れるかは分からない。ＰＣには血は流れないのだが、嗜好や意図的に血液のような物を入れる輩は少なからずいるだろうが、全員がそうだと思えない。恐らくは血液はウイルスの作用なのだろう。恐怖を煽る為なのか？　しかし、幸せそうに気絶しているのはなぜかは分からない。
「動ける者はいるか？」
まともに動けているのはウイルス耐性のある自分しかいないらしい。その中でイブだけがピクリと動く。
「な、何とか動けます」
妙なＢＧＭが流れ、明らかに本人と思しきピースした写真の顔に黒い棒線、もはや隠す気も無いのか、

ノルン在住のマーヤさんの投降と映像に書かれていた。
巨大狼、賢狼神マーヤのうるんだ瞳が拡大されていく。
『くぅーん』
『どうする～♪ルシファーさん？』
再び、音楽に合わせてマーヤの歌うような台詞が流れた。
『おわかりいただけただろうか？　この幼気なマーヤさんの瞳と子犬のような可愛い鳴き声が貴方には聞こえるだろうか？……』
謎の男性のナレーションが入る。
『分かりにくかった人の為にもう一度……』
再び、賢狼神マーヤのうるんだ瞳が拡大されていく。
イブが多量の血を吐き出して倒れる。
『もう一度……』
「鬱陶しい！」
さらに賢狼神マーヤの潤んだ瞳が拡大され、ルシファーはモニターに椅子を投げつけて破壊する。
その時、携帯電話からチャイコフスキーのセレナーデが流れ、黒いロゴマークでで、ＮＯＲＮ０３のＳＯＵＮＤＯＮＬＹの表示がされる。
『部下に恵まれなかったら……オー人事オー人事のノルンスタッフサービスです♪』
「スクルドか？　生憎だが、間に合っている」

『そう言わずに話だけでも聞いていただけますか？』
「何だ？」
『交渉しませんか？　もちろんタダとは言いません。ノルンが貴方を一日だけ雇い、保護します。１０万マテリアルでいかがですか？』
「ふざけるな！　俺を保護してノルンに何の得がある？」
『本音を言えばノルンは貴方という人材を欲しがっているのですよ。ノルンから依頼を受け、マーヤさんの暴走を止める為に戦ったという事にしておけば、天魔やエデン、ヘルの過激派からも理解が得られるかと』
「保護と言うよりマーヤを見過ごせと言う事だろ？」
『そういう風に受け取っても構いませんが、貴方の未来プランは死に近づいてますよ……大丈夫ですか？』
「余計なお世話だ……」
『でも、マーヤさ……』
スクルドが何かを言いかけたが、ルシファーは構わず電話を切る。
「マーヤめ！……バフォメット、私だ。すぐに来てくれ」
携帯電話でかけると、床から光の魔法陣が描かれ、山羊の頭と黒い翼を持つ魔神が現れる。
「お呼びですかルシファー様」
「私以外のこの艦の者を全て逃がせ」

「御意……しかし、ルシファー様はいかがされますか？」
「後で脱出する」
「分かりました……くれぐれも無茶をなさらずに……主は貴方しかいないのですから」
バフォメットが指を鳴らすと、光の魔法陣に包まれてオペレーター達と共に消える。
その刹那にサブモニターが自動点灯し、トロイホースから無数の砲身が現れる映像が拡大される。そして砲身からは歪む液体が放出される。
それらが何かに当たると、ネバネバの液体に包まれて雲の下に落ちていくオペレーター達。
「馬鹿な……ウイルス転移障害プログラムが組み込まれているのか！？」
この艦のコントロールが完全に奪われているのだろう。もはや、決断の時かもしれない。
懐中時計に入った妻と娘の写真を台に置き、自爆ボタンを押そうした刹那。
何者かの手がルシファーの手を掴む。
「神（マーヤ）は言っている……ここで死ぬべきではないと！」
手を掴んでいたのは落花生の殻を模した着ぐるみを被ったマーヤの姿だった。
「何だその格好は？　俺を笑いに来たのか！？」
マテリアルの薄さから恐らくはマーヤのＢＯＴなのだろう。思わず笑みが零れる。もうなにもかもがどうでもいいとさえ思える。
「落花生は千葉県の特産品なのだ。そして私はお前を笑いに来たのではなく、助けに来たのだ」
「何だと！？」

「これをね、こうやって、ドーン」
マーヤがルシファーを持ち上げると、ハンマー投げのような要領で一気に飛ばした。勢いよく飛ばされた勢いで天井の非常ハッチを破り、空へと飛び出していた。
「マーヤ！」
空いたハッチから見えるマーヤはなぜか敬礼する。
「リア充爆発しろ！」
ＢＯＴマーヤが叫ぶように言った刹那、トロイホースが大爆発を起こし、ＢＯＴマーヤが巻き込まれ、光の粒子となって消える。
「お前が爆発してどうする」

（マーヤ、賢狼神マーヤのＰＣをシャットダウンする）
（やれやれ翼無しでは飛ぶのが疲れるのだぞ）
巨大な狼の姿が光の粒となって消え、人型のマーヤが現れる。セミロングの茶髪には狼の耳、白のブラウスと植物の絵が描かれた茶色のワンピース、腰には九尾の尻尾が生えている。
これがワークステーション、豊穣神マーヤさんの姿なのだ。
（マテリアル反応複数確認！　数、５０。天魔総合連盟の残存兵力です）

「充分に楽に相手にできる数ではないか」
（油断しないでください。残存兵力はそれなりの強者です）
魔神達がマジックスペルカードをデバイスに二枚スキャンし、ビックバーンが放たれる。
「ふむ」
爆発を伴い、空が一瞬にして赤く染まり、溶岩の海と化す。
（マーヤさん！？）
魔神兵達がニヤリと笑う。だが、こんな事でやられるマーヤさんではない。
光の魔法陣が形成され、マーヤが魔神達の背後に現れる。
「二連発のビックバーンが同時に発動、×１００の大魔法で倒せるほどマーヤさんは甘くないのだがな」
「瞬間転移（テレポート）だと！？」
ウイルスを巨大な斧へと変える魔神兵ども。打点を大きくしてもあまり意味が無いのだがな。なぜなら……
「マーヤさんは強いからな！　水圧炎風撃（ブルー）Ⅲ」
魔神達が瞬間転移（テレポート）してマーヤを囲み、ウイルスアックスを振り下ろそうとする刹那。マーヤさんはマジックスペルカードをスキャンし、魔神達の隙間を抜け、裏拳を打つ。
『ＢＬＵＥⅢ』
マーヤさんの魔法が発動する。
「ほぁたぁぁぁっ！？」

裏拳を放った瞬間、青い炎を帯びた水の衝撃が魔神達を包み、空の彼方へと吹き飛ばす。哀れにも魔神達は空のお星様となってしまった。

水圧炎風撃（ブルー）Ⅲ、水圧と高音の炎と風の衝撃波を起こす魔法である。簡単に言えば、ジェットシャワーにアルコールの水と巨大扇風機を＋したようなモノなのだ。断じて中国拳法の達人なのではないのである。

「マーヤ！」

目の前に光の魔法陣が形成され、ルシファーの姿が現れる。

「やはり来たのだなルシファー」

（ルシファーさんを助けたんですか！？）

（成り行きでな）

（もう未来線はＺルートしか残っていません。ルシファーさんと共に地上に降りた場合、Ｚルートフラグが消滅し、ＢＡＤＥＮＤとなります）

（了解したのだ）

「俺を助けた事を後悔させてやる！」

捕まえようとするルシファーにジャブとフックを放ち、腕をガードに回させる。

「ふむ、格闘センスは無さそうなのだがな」

「俺だ！　すぐに発射準備をしろ！」

ルシファーが携帯電話型のデバイスを使い、誰かに命令した。

「何をするつもりなのだルシファー？　私はそんな物で倒せぬぞ」
パンドラがマジックスペルカードの神の視点（オラクル）を緊急発動する。
マーヤさんの内部モニターに宇宙から無数の人工衛星である衛星砲（ミストルティン）が映し出される。
「お前は死ななくても多くの人間は死ぬだろうな」
ミストルティンの一撃で規模の小さな町なら一瞬にして蒸発、どんな神の障壁でも貫く厄介な魔導兵器なのだ。
「本気なのかルシファー！？」
「悪いようにはしない俺の軍門に下れマーヤ！」
ＢＯＴを引き下げろと言わず、軍門に下れというあたりがルシファーらしい。
「それならまだＢＯＴを下げろ、撤退しろと言った方が簡単なのではないか？」
「３分間、待ってやる」
小さな町と大きな川が見える。どの魔法を検索しても、被害を抑えるのは難しい。
「この時間でカップラーメンでも作れと言うのか？」
カーレース気分で狼のような唸り声を上げてやったが、ルシファーは眉一つ動かさない。
「答えを聞こうマーヤ！」
マーヤさんはルシファーに光る青い宝石を見せる。
「なに？」
青い宝石はフェイクである。すかざパンドラに解呪結界（バルス）を発動させる。

「解呪結界（バルス）！」
【ＢＡＬＳ】
青白い閃光と共に空間に亀裂が走り、マーヤさんの衣服が消滅し、デバイスのパンドラが吹き飛ぶ。
「目がああああっ！？　目がああああっ！？」
解呪結界（バルス）は地球上とその周囲に存在する全ての魔法術式を破壊する魔法であり、禁忌とされた滅びの魔法である。もちろん魔導兵器にも有効。並の魔導兵器ならほぼ１００％分解する。
神の視点（オラクル）で衛星砲（ミストルティン）に亀裂が走り、粉々に崩れ去って大気圏へと落ちていくのを最後に映像が消える。
「マーヤ！」
「さらばなのだ」
全ての魔法術式が壊れた為に浮遊加速（エアーブースト）が解除、マーヤさんは地上へ落ちるしかない。
「絶対に逃がさない！」
下降するマーヤさんに翼を広げて向かって来る。
マーヤを掴むと、羽交い絞めにするルシファー。
「マーヤさんの処女を奪うつもりなのか？」
ルシファーと目と目が合い、顔を背けるマーヤさん。
「恥ずかしそうに頬を染めるな！」
子持ちなのにウブな反応をする。しかし、気づいていないのだからルシファーはまだまだなのだな。
「しかし、どうするのだルシファー？　もはや何の魔法も発動しない。このまま落ちるまで殴り合いを

続けるか？」
「お前を倒せるならこの命が尽きたとしても！」
「マーヤさんは勘弁したいのだがな」
下降していく先には土手のグラウンドが見える。その地上でちょこちょこ動く人影が見える。
よく見ると、小さいマーヤが円形のトランポリンのような物を運んで来る。
「無駄だ！　どんな小細工を用意しても私と接触した時点でもはや未来線は変えられない！　お前のＢＡＤＥＮＤを満喫するが良い！」
用意した物がどうやら間に合ったようだ。
ズボッ！？　という音と共にトランポリンを突き抜け、柔らかい感触が身体を覆う。
「何だこれは！？　甘い！？」
クリーム塗れの顔を上げるルシファー。
「こういうのを一度はやってみたかったのだ」
全身クリーム塗れのマーヤさんはチビマーヤからプラカードを受け取り、ドッキリの文字をルシファーに見せる。
「ふざけるな！　こんな事でＢＡＤＥＮＤは覆らない！」
「だからドッキリだと言ったであろう？　私はマーヤではない。ＢＯＴマーヤなのだ。最後の頼みの綱のＺルートフラグが完遂されたのだ」
チビマーヤがＢＯＴマーヤに落花生の着ぐるみを被せる。

「なに！？」
「ちなみに気づいていなかったようなのだが、日本全国にもＢＯＴは散らばっておるのでな」
膝を付くルシファーにチビマーヤが野球帽を被せ、甲子園とラベルに書かれた空きビンを置く。
「……馬鹿な」
そう本体のマーヤさんが解呪結界（バルス）を発動させる刹那、時間停止（クイックタイム）を発動させ、ＢＯＴと入れ替わっていたのだ。
「気晴らしに私と一戦を交えるか？　ＢＯＴの私とチビマーヤ数体では五分五分で、勝ったとしてもたいした情報を引き出せないと思うのだがな」
「マーヤあああああっ！？」
ルシファーの叫びがグラウンドに木霊する。
（全ＢＯＴ部隊降下確認しました。マーヤさん、戦ったみなさんお疲れ様でした）

千葉県野田市、市街地。
「親方、空から女の子が！？」
その少年との出会いは必然だった。
ふわふわと落ちていく裸のマーヤさんを建設途中の木造の軸組みの上で嫌そうに見上げる少年。
この出会いがこの世界、いや、宇宙を変えてしまうほどの事件が起きてしまうとは誰も想しなかったに違いない。

１章　ファーストコンタクト～未知との遭遇

２０１４年　４月２８日　９時５０分　粕壁高等学校。

１時限目の授業が終わり、休み時間となった。いつも来るはずの幼馴染、平和望（へいわのぞむ）は授業に来なかった。ＨＲに遅れてくるのはともかく、授業に来ないのは珍しい事だった。よく風邪で休む事も無ければ、授業をサボるような不良でもない。

１６歳の希望灯（きぼうあかり）にとって未知の出来事だった。ドクッドクッと心臓の音が聞こえてくるようだった。何かが違う、嫌な予感が過る。

携帯でメールをしても電話しても望は出なかった。

９時５５分が経過して携帯電話を見ていたクラスメイトの女子が騒ぎ出した。

携帯電話のニュース速報を見ると、男子高校生バラバラ殺人の文字が横に流れる。ドクッドクッと心臓の鼓動が早まる。嫌な予感が拭い去れない。

９時５６分、携帯電話のワンセグＴＶを見ていた男子クラスメイトが教室のＴＶを点けるように友人

に言う。
男子生徒の一人がＴＶを点けた瞬間、飛び込んできた映像はバラバラ殺人の文字と平和望（１６）の文字とその写真だった。
何かの間違いだ……
違う！　違う！　違う！　違う！　違う！　違う！　違う！　違う！
灯、自身にそう何度も言い聞かせた。

４月２９日　８時４０分。
灯の隣の席に花瓶の花が飾られた。
平和望の死は確定された。
神様はなぜこのような仕打ちを灯にするのでしょうか？　灯が何をしたと言うのでしょうか？
――神様……いるなら私の好きな人を殺さないで……こんなの悲しすぎる！
（それがお前の願いなのか？）
脳裏に教室に立つ十二枚の翼を持つ巨大な銀色の狼の姿が映る。
――なに？　これは？　まるで夢のような……
心臓の音が高鳴る。
その刹那に視界がブラックアウトし、いつもの教室のざわめき声が聞こえた。いつもの教室の風景が視界に入る。

隣の席には花瓶は置かれていなかった。
携帯電話を見ると、４月２８日　９時５０分だった。
「……夢だったの？」
溜息をつき、携帯のニュース速報を見ると、集団暴行事件の容疑者全員、橋の柱に埋まるという訳の分からない文字が流れていた。
「どういう事なの？」
９時５５分が経過して携帯電話を見ていたクラスメイトの女子が騒ぎ出した。
デジャブを感じる。心臓の高鳴りを感じる。また夢の出来事が再現されてしまうのだろうか？
嫌な予感が過る。
９時５６分、携帯電話のワンセグＴＶを見ていた男子クラスメイトが教室のＴＶを点けるように友人に言う。
男子生徒の１人がＴＶを点けた瞬間、飛び込んできた映像は……男子高校生数人が橋の柱にめり込んだ姿だった。ピクピクと手足が動いているのが分かる。
どっと大笑いするクラスメイト達。
ニュースによれば、集団暴行事件の容疑者の高校生らしかった。集団で暴行および恐喝をする常習犯だったらしい。それが何者かに返り討ちに合った。しかも、あのような状態でありながらも奇跡的に軽傷らしかった。
訳が分からない。

どっと安堵の溜息が漏れる。
けれど幼馴染が来ないのは変わりなかった。
１０時００分、休み時間が終わり、チャイムが鳴る。二時限目の授業が始まろうとしていた。
「では、授業を始めます」
ハゲかけで眼鏡をかけた田中先生が、教本を取る。
「マーヤ！　だから付いて来るなって！　これから授業なんだよ！　お前のせいで遅刻だよ！」
その時、教室の外から望の叫ぶ声が聞こえた。
「そういかぬぞ！　お前は私を不良から救ってくれたのだ！　ジュースを奢ってやろう！」
「何だよこのマーヤ印の濃厚どろりピーチって！？　何処の海外メーカーが作った商品だ？」
「全て私の自作だ」
ガラッと窓を開ける音が聞こえる。
「ああっ……！　どうせ訳の分からない媚薬だろ？」
イラッとした望の声。
「うぉっ！？　窓から捨てるな！？　あの病弱な幼女が喜ぶ私の自信作なのだぞ！　私がユグドラシルで自家栽培した桃を１００％使用し、マーヤさんの手絞りで美味しく仕上げたのだぞ！」
「知るか！」
「待つのだ望！」
ガラッと教室の扉が開き、望が出て来る。

灯が勧めたウルフカットを保ち、顔も狼さんのように可愛く気高い姿は望に間違いなく、当たり前のように存在していた。
「すいません遅れました！」
「望！」
授業中なのにも関わらず立ち上がってしまう。無事なのが嘘のように思えたからだ。
「……灯？」
「ふむ……なかなか可愛いではないか私に紹介するのだ」
望の背後にくっ付いていたのは一人の美少女だった。同じ年頃ぐらいで、セミロングの茶髪にその頭の上には狼のような立派な付け耳？　人間の耳もあるのだからそうに決まっているのだが、稲穂の模様が描かれた茶色のスカートの腰には九つの尻尾がふさふさと揺れ動いていた。アクセサリーとは思えない本物のような質感。本物の人狼ではないかと、期待してしまうのだ。瞳も光の加減によって金、茶、青から緑へと変色しているように見える。
「おい、お前……そっちの気があるのか！？」
「ショートカットに透き通るような白い肌、なかなかの美人ではないか？　バスト８４、ウェスト５６、ヒップ８７といったところではないか？」
こちらに笑顔を向けるマーヤと呼ぶ少女は何処かで会った事があるような気がした。
それは運命的な出会いのように思えた。

「誰だねその子は？」
ハゲかけの教師、田中がまじまじとマーヤを見る。
このままマーヤを教室に居座り続けるのはまずいような気がする。
「部外者の変態です」
「変態なのではない！　私は豊穣神マーヤ！　れっきとした女神なのだ！」
その発言に望は思わず頭を押さえた。
クラスメイト達は異端な侵入者に騒ぎ始める。
「えと……マーヤさん？　どこのクラスかね？」
教師の田中を無視して望に向き合うマーヤ。
「本来は人間達に知れ渡っていけない禁則事項なのだがな。率直に言おう望！　私はノルンの代表として望をスカウトしに来たのだ！」
「……あの……話、聞いてます？」
マーヤは構わず教師の田中に無視を続ける
「女神様のスカウトかよ……何処のＲＰＧだ！　勇者になれとかそう言う事か？　その宗教とかそういうのはお断りだからな！」
「まだそんな事を言っておるのか！　マーヤさんが超常現象の数々を見せてやったというのにまだ足り

ないのか？」
懐から取り出した数枚のカードを見せるマーヤ。
「ああ……嫌というほど分かったよ！　だからこそだよ！　そんな現象、信じたくないし！　そんなゴタゴタに巻き込まれるのはごめんだ！」
「私が望を誘っているのは救世主（メサイア）などではないのだ。ノルンの神使（しんし）として雇いたいのだ」
神使、つまりは神の使いだ。つまりはマーヤは自分を部下として雇いたいと言っているのだ。
「俺に何のメリットがあるって言うんだ？」
「人助けが出来て給料が良い、救世主（メサイア）のような完全出来高制やハンターのような完全報酬制ではなく、時給１２００円に歩合＋交通費完全支給、福利圧制もあるぞ、もちろん時間に合わせるので高校生活をエンジョイしながらできるのだ」
いや、何かいろいろと可笑しいよ。
「お金の問題じゃなくてだな……だいたいノルン？　神使というのは何をやるんだ？」
「簡単に言えばな……人助けをしながら訳の分からない者と戦うのだ。私と共にこの世界……いや、この宇宙を救ってみないか？」
説明が簡単すぎるだろう！　しかも説明が簡単なわりに規模が宇宙ときている。
「いくら金が貰えても訳の分からないモノと戦いたくないんだが……しかも、お前の保護観察はどこまでが対象なんだよ！？」
「それならばしかたないのだ」

懐からキューブ状のクリスタルを取り出し、カードを読み取らせると、床から二つの光の魔法陣が描かれ、目の前に赤い扉と青い扉が現れる。
「何で教室に扉が！？」
さらに急に周囲が暗くなったかと思えば、数個のスポットライトが望に当てられ、聞き覚えのあるＢＧＭが流れる。
「クイズ……ミリ〇ネア」
「なんだ！？」
気づけば、マーヤと向かい合った席に座らされ、目の前には妙なモニターが配置されていた。
「ちなみに扉はどこでもドア～♪ではない」
「いや、分かってるよ。何なんだよこれは！？」
「何と望さん、いきなり１０００万円の問題に挑戦できます」
なぜか棒読みのマーヤ。
「おいちょっと待って！？　何でいきなりクイズをやらされるんだ！？」
「貴方の人生を変えるかもしれない……では問題！」
「話を聞けよ！」
聞き覚えのあるＢＧＭと共にスポットライトがシフトする。
「Ａ、赤の扉を選んでマーヤさんと出会った摩訶不思議の現象を綺麗にさっぱり忘れる。Ｂ、青の扉を選んでマーヤさんと共に宇宙を救うアドベンチャーに旅立つ」

「青の扉に完全に誘導してるじゃねえか！？」
「望君、頑張って！」
旗やチアガールのボンボンで応援する生徒達、その手には札束が握られていた。
「おい！　この馬鹿女神に俺を売る気か！？」
「だって俺達には関係無いしな」
悪友の治（おさむ）がヘラヘラと笑う。
「待ちたまえマーヤ君！　君は間違っている！」
「ふむ」
「理性（りせい）！？　助けてくれるのか！？」
眼鏡をかけたエリート優等生、見た目そのままの生徒会長で正義感も強い。
「私利私欲の為に人を勧誘、買収するなど例え神であっても許される事ではない！」
「お前は食べ物で何が好きなのだ？」
「ん？　たい焼きかな？」
「マーヤ印のたい焼き！」
マーヤは懐から取り出した湯気を帯びたたい焼きを投げる。それは理性の口の中へと放り込まれる。
「んんっ！？　これは！？　熱っ！？　だが、これは……もちもちっとした生地にクリーミーでとろりとしたこし餡……舌の中で生地と餡子がとろける新食感！　これぞ神の新境地、味のエデンの園や～」
あの真面目な生徒会長の理性のシリアスが一瞬にしてとろけるような笑顔へと崩壊した。

「望を勧誘するが良いな？」
「好きに勧誘すれば良いやないか～」
歪んだ笑顔のまま答える理性。
「フフフッ！？　これで邪魔者はいなくなった」
「どこまで汚いんだ！？　お前本当に女神か！？」
「フフフッ……それでは問題なのだ」
「残念だがマーヤ、こんな二択、俺は迷いもなく答える！」
「ふむ、では選んで貰おうではないか。赤の扉か？　それとも青の扉か？」
「赤の扉だ！」
その時、三つのアイコンがモニターに映し出される。
「ライフラインが残っているのだが、使わなくて良いのだな？」
「例えばオーディエンスこの場にいるクラスメイト達にこの選択肢のどちらを選んだ方が良いのかを選択してくるはずなのだ。友情を信じてみるなら使ってみるのも良いかもしれぬな」
「そうだな……じゃあ、オーディエンスを使う」
金やら何やらを受け取ってしまうクラスメイトだが、自分の事をどうでも良いと思う友人はいないはずなのだ。
モニターのオーディエンスのアイコンが点灯し、拡大される。
「クラスメイト、教師を含めて３８人に聞いてみようではいか。どんな選択をすれば良いのか」

ＢＧＭが流れ、棒グラフがモニターに表示される。
クラスメイト達が導き出した答えは圧倒的多数……Ｂ、３７人の青の扉だった。Ａ、赤の扉は１人のみだった。
「この裏切り者！」
気づけば教師も札束も握っている事に気づく。どうやらここのクラスメイト達は教師共に腐っていたようだ。
「ふむ、一人だけＡを選んでいる者がいたようだ。だが、この者の心情は私的には分かるのだがな」
ちらりと灯を見るマーヤ。
それは灯が赤の扉を選んだという事なのだろうか？
「クラスメイトの友情とは、はかないものなのだな」
「お前のせいだろ！」
「しかし、家族にまで裏切られまいて」
「まさかこのテレフォンて……」
「よし、テレフォンを使うのだな？　家族と繋がっておるぞ存分に話すが良い」
「ちょっと待てええええぃ！」
テレフォンのアイコンが点灯し、拡大される。
「もしもし望の母か？」
「はい、望の母の光（ひかり）です」

モニターに映し出されたのは間違いなく望の母の光だった。そしてその隣には妹の微美（まびろみ）、父の安定（やすさだ）がいる。
「望が１０００万円の問題に挑戦しておるのだ。家族の心境としてはやはり正解して欲しいと思うのだが、どうなのだ？」
「そうですね。母の心境としては正解して欲しいところですね」
笑顔で答える母の光。
「ふざけんなよ！　結局はみんな金かよ！」
思わずモニターを叩く望。
ガツンと音を立てて、周囲のクラスメイトが静まり返る。
どいつもこいつもふざけている。結局はみんなマーヤの金で操られているだけなのだ。
『よく聞いてください望。私はマーヤさんのお金や物、一切の恩恵を受け取っていません』
モニターに映る母の光の顔が真面目に望を直視する。
「じゃあ、何でだよ？　訳が分かんねえよ……」
『壮絶な死が貴方を襲おうとしています。このまま死を受け入れるよりは戦って生きて欲しいのです……かつての私達のように』
「壮絶な死？　かつての私達ってどういうことだよ！？」
『望、俺と光はかつては救世主（メサイア）だった。俺はエデン側、光は天魔側の救世主（メサイア）だった。自分の命を守る為に敵として戦ってきた。マーヤさんと共に戦い、乗り越えていけ……今は言えないが、お前にもいずれ

分かる時がくる』
母から父の安定にカメラが切り替わる。
「意味が分からねえよ」
「にいもマーヤさんに捕まったら逃げられないよ」
アップされた微美がウシシッと、口を押さえて笑う。
というか、なぜ家にいるのか不明ではあるのだが。
「お前もかよ……うちの家族はどうなってんだよ！？」
「うちはマーヤさんの救世主（メサイア）だけど、神使なんていきなり大昇進じゃん！　分からない事があったら先輩のうちに何でも質問しなよ」
その言葉を最後にプツンと画面が消える。
「おっと！？　ここで時間がきてしまったのだが……」
「いろいろとツッコミをいれたいけどさ……今は良いや」
「決定打に欠けるというのならまだライフラインが残っているのだが、どうするのだ？」
モニターがライフライン選択画面に戻る。
「最後のはフィフティ・フィフティしかないだろ？　消す必要は無いだろ」
「フィフティ・フィフティを使うのだな？　欲深い奴なのだな。そこまでして１０００万円が欲しいのか？　ならばしかたない、ほれ」
「ちょっと待て！？」

モニターのフィフティ・フィフティが点灯し、拡大される。
「コンピューターが適当に都合の良い解答を導き出してくれるのでな」
聞き覚えのあるＢＧＭと共に選択肢が消える。そして残ったのは……
「青の扉しかねえじゃねえか！？」
「ふむ、二択しかないのだから１つしか残らないのは当たり前なのだがな」
「お前が勝手に使って消したんだろ！」
わざとらしく目を逸らすマーヤに怒りの感情が芽生えてくる。
「選択肢は一つしかないのでな……Ｂ、青の扉なのだ。ファイナルアンサー？」
沈黙の中、マーヤのどや顔が望を凝視する。
まだ解答していないのに意味の無い溜めのどや顔を続けるマーヤ。このままでは解答された事になってしまうのだろう。
「せっかくだから……俺は赤の扉を選ぶぜ！」
後ろを振り向けば、青の扉と赤の扉はまだこの空間に存在していた。
「残・念！　不正解！」
マーヤが宙に浮くキューブ状のクリスタルにカードをスキャンした刹那、妙な電子音が響く。
【ＣＡＳＴ　ＯＦＦ！】
振り向くと、マーヤの服が一瞬にして破け、一糸まとわぬ姿となる。
「お前、本物の変態かよ！？」

だが、青の扉は触れる位置にある……これで自由を……
【ＣＬＯＣＫ ＵＰ！】
【ＣＬＯＣＫ ＯＶＥＲ】
気づけばいつの間にか、目の前に裸のマーヤがそこに居た。
「うわあああっ！？」
マーヤに羽交い絞めにされたまま、青の扉へと進もうとする。
「このまま私と共にゴールしようではないか！」
「やめろ馬鹿！？」
青の扉に身体が入りかけ、縁にしがみ付く望。
「マーヤさんはノンケでもホモでも構わず食っちまう女神なのだ！」
「完全に趣旨が変わってるじゃねえか！？」
マーヤの馬鹿力に敵うはずもなく、扉の縁から簡単に引き剥がされてしまう。
「ああ……」
――終わった俺の人生。
その時だった。
「私も青の扉を選びます」
「ふむ」
客席から立ち上がり、歩む寄って来たのは希望灯だった。

「私も連れて行ってください！」
その灯の行動にクラス中が騒ぎ始めた。